

徒然なる日記121125～劣等感を 覚えること～

E-book推進協会

劣等感を覚えること

自分は劣等感の塊だと感じることもある。ふと自分の人生や今自分を動かす熱意の大元を省みると、劣等感が動機となっていることが多々あると気付く。

同時に自分だけでなく、人間の歴史は劣等感、裏を返せば優越感との相克に突き動かされて塗り替えられてきたと、言えなくもない。そういう事例は少し歴史に思いを巡らせば容易に挙げられる。生活水準、ステータス、給与、学歴などをめぐって、特定の誰かと自分を、あるいは特定の国、地域と自分の居住地を比べ「悔しい負けた、いや勝った」と一喜一憂する。

よくよく考えれば下らないことだ。ある条件下では。生活するうえで優劣を競うべき点は生存競争、その1点に集中する。すなわち、食事をし、種を残す、という点だ。

前者、「食事」をめぐっては、かつての日本なら競争し、1億人の腹を満たすため、優越したい気持ちでいたのも分かる。ただ、日本に関して言えば、もう富みに富んだ。食をめぐって日本も、日本人個々人も競争する時代はとうに過ぎたろう。

問題は後者の「種を残す」、という生殖本能。原始時代なら強者の遺伝子を後世にという論理で単純だった。それが高度に文明化された現代では、学歴、給与、ステータス、さまざまな切り口で、勝った負けたの優劣を競って、子孫繁栄に必死だ。そのために同じ土俵で、違う種目を展開している。そおなイメージだ。

それを指して、下らない、と言った。その後の「ある条件」とは、食事や衛生環境が不十分な国においてはまさに死活問題で、競わなければ生き残れない。ただ、そうしたことに困らない日本や先進諸国においては、優劣の価値観が下らなくなりつつある。

うまくまとまらないが、いいんだ。とりあえず自分の備忘録。日記だから。またいつか読み返して、このくだらなさに対する答えが少し見えれば、書こうと思う。今は答えは見えない。見えないながら、自分を動かしているのは劣等感を克服したいという気持ちだということだけは分かる。

2012年11月25日記す